
習熟度別クラス編成とプレイスメントテスト

佐藤 敏子
中川 武
山名 豊美

1. はじめに

(1) 効果的な学習を進める条件

佐藤・中村（1999）は「リスニング指導において学習成果を出すためには、学習環境条件を整える必要がある」と結論している。平成8年度から実施した実験計画の条件を列挙すると、

- (1) 平成8年度は週1回（90分）の授業の中で聴解力の伸長を見る。
- (2) 平成9年度は集中型授業の導入及び、指導法としてはシャドウイング、教材としてビデオ教材を採用する。
- (3) 平成10年度は上記の条件に加えて「習熟度別クラス」を加える。

以上のように、条件を増やして実施した平成10年度に初めて上位群・下位群ともに学習効果が認められた。この結果から「学習効果を上げる条件の最も重要なものは、習熟度別クラス編成である」といえる。

(2) 学習効果を上げるための学習者の条件

平成10年度の実験結果より「聴解力の伸長は学習者の文法運用力に関わっているのではないか」という仮説が浮上した。これにより平成11年度はこの仮説を実証する実験を行い、佐藤・中村（2000）で「聴解力は文法運用力と相互補完の関係にある」という結論を得た。効果的なリスニング指導を行うためには、学習者側の条件として「基本的な文法運用力」が必要であるという付帯条件が加わった。特に、伸長が見られない学習者のためには、授業の中で「文法運用力」を伸ばすためにどのような指導を行えばよいかという問題が次年度に残された。

(3) 文法運用力を高める指導

平成12年度は学習者の文法運用力に関する調査を開始した。佐藤・中川・岡田（2001）では学習者の大学入学時における文法運用力を調査し、「文法項目は知識として持っているが、それをどのように使ったからよいか分からない学習者が多い」ことを明らかにし、学習者間の習熟度差が予想以上に広がっていることが明らかになった。

平成13年度は12年度の結果を踏まえて「学習者の文法運用力の伸長を図るために、文法項目の定着を目標とし、その目標を達成するために口頭練習を中心とした活動を設定」し、その指導法の有効性が実証された。(佐藤・山名・中川・岡田 (2002))

2. 目的

学習効果を上げるためには必要条件として「習熟度別クラス編成」があげられることは、以上の結果から疑いがない。しかし、どのような観点でクラスを分ければ良いかという大きな問題がある。本稿では、今までに習熟度別クラス編成に使用したテストの問題点を明らかにし、今後の展望を述べる。

3. クラス分けの基準

(1) 平成10・11年度

この年より実験的に習熟度別クラス編成を開始した。「英語の聴解力は、読解力との相関が高い」という仮説により Jacet Basic Listening Comprehension Test Form A を採用し、学習者の意欲を尊重するために「英語学習の調査」を実施し（クラスの到達目標を明示し、学習者の希望を考慮した）、さらに授業での活動状況を加味し（混成クラス）、クラス編成を行った。英語の総合的学力を聴解力で測定し、それに学習者の「意欲」と指導者の「学習力測定」を基準としたものである。11年度は前年度の「文法運用力」に関する問題が抽出された年度ではあるが、「文法運用力」に関する調査は行っているが、それを「クラス編成」にはまだ使用していない。

(2) 平成12・13年度

「聴解力は文法運用力と相互補完の関係にある」という前年度の結果から、学習者の英語学習力を判断するためには、文法運用力を測定する基準を持たなくては、適切なクラス編成はできないことは明らかである。しかし、「どの文法項目を取り出して判断すれば、全体の『運用力』になるのか」ここでは明らかになっていない。そのため、従来の聴解力測定（Jacet Basic Listening Comprehension Test Form A）と、それに新たに「読解力」（Interchange Placement Test, 詳細については後述）を加えて測定し、クラス編成を行った。言い換えればこの2年間は、別の観点（レベル設定）から作成され別々の問題を実施し、それを合計し、学習者の学習力を測定し、クラス編成を行ったことになる。（平成13年度から学習調査・検定用として Interchange Placement Test を使い始めた。）

適切なクラス編成をするために学習者の学習力を正しく判断する（測定する）テストが必要である。プレイスメントテストとして必要な条件^①を備えたものを使用しなければならない。

4. G-TELP と Interchange Placement Test

(1) 概要

a. G-TELP

本調査で使用した「G-TELP (General Tests of English Language Proficiency)」は、SDSU (San Diego State University, 米国カリフォルニア州) により開発された英語運用能力を測定および評価するためのテストである。テストは受験者の能力により以下の4段階に区分される。

レベル 1	ビジネスなどの日常生活の実際の場面で、ネイティブと同様に複雑なコミュニケーションができる。
レベル 2	ビジネスなどの日常生活の実際の場面で、ネイティブと支障のないレベルでコミュニケーションができる。
レベル 3	日常生活の限られた範囲の表現方法を用いて、ネイティブとコミュニケーションができる。
レベル 4	形式的な表現方法を用いて、ネイティブと簡単なコミュニケーションができる。

(G-TELP 日本事務局発行の試験実施案内より抜粋)

筆者らにとってG-TELP を用いた実験は今回が初めてであることや、被験者群の入学段階での平均的な英語能力を考慮した結果「レベル 4」のテストを採択した。

テストの構成および試験時間は以下のように規定されている。

- (1) Grammar (文法) 20問/20分 選択式
- (2) Listening (聴解) 20問/15分 選択式
- (3) Reading & Vocabulary (読解・語彙) 20問/30分 選択式

通常、テストはこの項目順に行われるが、本実験では運営の都合上(2) Listening (聴解) から実施した。このパートではマークシートへの記入方法、問題および解答の指示が予めカセットテープに録音されており、これを再生して被験者に聞かせる形で試験を実施する。一斉に全20問を終了した後で、続けて残りの2パートを解答するよう指示を出した。テープでは、記入方法などの一般的な諸注意を除いては全て英語による指示が与えられたが、今回被験者の大半がこの種のテストを経験したことのない学生であることや、解答の際に多少の混乱が生じることを想定して、特に試験開始前に念入りな説明と確認を試験監督者(筆者ら)自らが日本語で行った。これは「英語(ナチュラルスピードで1回のみ流される)による指示を正しく理解してテストを受験できるか否かも測定されるべき能力の一部である」という視点に立てばやや問題の残る対応だったとも思われるが、適切なプレイスメントを目的とする上で、点数化されるテスト項目以外の要因を極力排除するためには必要な処置であったともいえ、これは議論の余地が残る点のひとつである。

b. Interchange Placement Test

同一の被験者を対象として、もうひとつのテストを実施した。Interchange Placement Test は Jean Turner ほか4名により共同開発されたプレイスメントテストで、本来はケンブリッジ大学出版局が刊行する英語教授用テキスト Interchange のより適切なレベル設定を目的としたものである。このテキストは易しいものから順に Intro, Level 1, 2, 3 の4つに分類されるが、まず学習者がプレイスメントテストを受験し、その点数によって担当教員が「どのレベルの教材を選定すればよいか」を知るひとつの指標として利用することが可能であるという（同テスト冊子（英文）より。以下同テストに関する引用は全て同資料からによる）。

本テストの構成および試験時間は以下のように規定されている。

- (1) Listening (聴解) 18問/15分 選択式
- (2) Reading (読解) 18問/20分 選択式
- (3) Language Use (語法) 34問/15分 選択式

本来であればこれら全70問50分のテストを実施するのが理想であるが、時間的な制約から(1) Listening (聴解) のみ実施した（残り2パートについては後期学期開始後（10月）に本研究と同じ被験者を対象として実施済であるが、本論文とは関わりがないため割愛する）。4月にプレ、7月にポストの形で同一の問題を用い、同一の学習者を対象にテストを実施し、学習効果を測る目安として用いることとした。

(2) 実施

a. G-TELP

1. 対象 茨城県内4年制大学平成14年度新入学生（151名）
2. 時期 平成14年4月
3. 時間 65分
4. 項目 (1) Grammar (2) Listening (3) Reading & Vocabulary

b. Interchange Placement Test

1. 対象 上記に同じ
2. 時期 平成14年4月（プレ）、7月（ポスト）
3. 時間 15分
4. 項目 (1) Listening

(3) 結果

a. 総合

被験者全体の結果を示したのが表1である。該当する全テスト（計3回：G-TELP, Interchange プレ（4月）およびポストテスト（7月））を受験した被験者は151名であった。G-TELPは3つのセクションに分かれているが、うち最も平均点が高かったのは文法項目のテスト（49.97）であった。被験者は新入学生であり、少なからず大学受験問題を意識した学習をしていたものと仮定する

表 1

テスト	被験者数	最小値	最大値	幅	平均	標準値差	ITPOST-ITPRE (平均差)
G-TELP・T	151	55	205	150	120.1	32.17	
G-TELP・G	151	20	90	70	49.97	16.19	
G-TELP・L	151	5	75	70	35.46	13.42	
G-TELP・R	151	5	75	70	34.67	12	
IT・PRE	151	5	17	12	10.89	2.31	
IT・POST	151	6	17	11	11.95	1.89	1.06

T=総合 G=文法 L=聴解 R=読解・語彙 IT=Interchange
PRE=プレテスト POST=ポストテスト

と、理解できる傾向である。しかしこのことは、中学校・高等学校の英語授業が依然として「文法偏重主義」に則って行われていることの端的な例でもある。学習指導要領の改訂によって現場に根付いたかと思われる「オーラルコミュニケーション」も、実際には「文法学習の時間」にすり変えられている事例が半ば公然のものとなっており、なお多くの課題が残されていることを思わせる。

テスト問題項目は全て非公開であるため内容に関する詳細な記述は差し控えるが、筆者らが事前にテスト問題を検討した結果、セクション別にかなり難易度のばらつきがあることが指摘されている。全体的な印象からして、文法セクションには平易な語彙、文脈の中で基礎的な文法運用力を問う項目が数多く含まれており、日本人学習者にも充分馴染みのある出題内容であったことがこの結果につながったものと思われる。その一方で聴解、読解・語彙のセクションでは得点が伸びていない(35.46および34.67)。聴解セクションでは、その出題方法の一部にやや変則的とも思われる部分があり、恐らくこれまでにほとんど経験のないタイプの出題方式であったことが被験者をまごつかせたものと推察できる。さらに一部の被験者にとっては、解答方法そのものが明確でない上にナチュラルスピードの英語が一度きり流れるという、不慣れな条件の下で解答をするという二重の課題に混乱したものと思われる。

b. 相関

表 2 は、各テスト間の相関係数 (Pearson) を示している。

概して低い相関である。実施時期が比較的近接している「Interchange プレ」と「G-TELP 総合」

表 2

テスト	G-TELP・T	G-TELP・G	G-TELP・L	G-TELP・R	IT・PRE	IT・POST
G-TELP・T	1	-	-	-	0.394**	0.122
G-TELP・G	-	1	0.442**	0.365**	0.349**	0.138
G-TELP・L	-	0.442**	1	0.358**	0.286**	0.035
G-TELP・R	-	0.365**	0.358**	1	0.266**	0.102
IT・PRE	0.394**	0.349**	0.286**	0.266**	1	0.236**
IT・POST	0.122	0.138	0.035	0.102	0.236**	1

**=相関係数は 1%水準で有意 (両側)

が中程度の相関 (0.394) を示した以外は有力な相関は見られなかった。先述の通り, Interchange テストは本実験では時間的な制約からリスニングのパートのみを分析対象としているが, G-TELP の同セクションとの関係を見てもほとんど相関がない。総じて相関係数が伸びなかった理由のひとつは「問題項目数の少なさ」に起因すると思われるが, ひとくちに「リスニングテスト」といっても, 実のところどんな能力を測定しているのかはテストによって千差万別であるともいえる結果である。Interchange プレとポストの相関も0.236と低く, 被験者の中には各テストに対して不安定な反応 (当て推量による解答など) を行った者が含まれていると推測できる。

c. クラス別傾向分析

表 3

クラス	テスト	被験者数	最小値	最大値	幅	平均	標準値差	ITPOST-ITPRE (平均差)
a	G-TELP・T	18	100	205	105	127.5	25.51	
	G-TELP・G	18	40	85	45	54.44	12.35	
	G-TELP・L	18	25	60	35	38.33	9.07	
	G-TELP・R	18	15	75	60	34.72	13.23	
	IT・PRE	18	5	14	9	10.17	2.2	
	IT・POST	18	6	17	11	11.83	2.81	1.66
b	G-TELP・T	11	75	95	20	87.73	7.54	
	G-TELP・G	11	20	50	30	34.55	10.83	
	G-TELP・L	11	10	45	35	24.55	9.34	
	G-TELP・R	11	10	45	35	28.64	10.51	
	IT・PRE	11	8	15	7	10.73	2.05	
	IT・POST	11	8	14	6	12.18	1.78	1.45
c	G-TELP・T	19	110	190	80	128.42	19.22	
	G-TELP・G	19	40	85	45	55.26	12.3	
	G-TELP・L	19	20	50	30	36.32	9.4	
	G-TELP・R	19	20	55	35	36.84	10.7	
	IT・PRE	19	6	14	8	11.21	1.87	
	IT・POST	19	9	14	5	11.58	1.5	0.37
d	G-TELP・T	14	55	100	45	85.36	15.38	
	G-TELP・G	14	20	60	40	36.79	11.2	
	G-TELP・L	14	5	35	30	23.57	9.49	
	G-TELP・R	14	5	40	35	25	8.99	
	IT・PRE	14	7	15	8	11.07	2.59	
	IT・POST	14	6	16	10	11.36	2.68	0.29
e	G-TELP・T	21	125	205	80	151.9	22.44	
	G-TELP・G	21	50	80	30	65	10.37	
	G-TELP・L	21	25	75	50	42.62	11.58	
	G-TELP・R	21	30	65	35	44.29	10.28	
	IT・PRE	21	7	17	10	11.48	2.29	
	IT・POST	21	11	15	4	12.33	1.28	0.85
f	G-TELP・T	25	60	120	60	104	17.68	
	G-TELP・G	25	20	65	45	40	11.64	

	G-TELP・L	25	15	55	40	33	12.75	
	G-TELP・R	25	15	45	30	31	8.16	
	IT・PRE	25	6	15	9	10.04	2.28	
	IT・POST	25	9	15	6	12.68	1.46	2.64
g	G-TELP・T	25	125	200	75	153	22.73	
	G-TELP・G	25	45	90	45	63.4	12.97	
	G-TELP・L	25	25	70	45	47.4	13.24	
	G-TELP・R	25	20	65	45	42.2	10.52	
	IT・PRE	25	7	16	9	12.48	1.98	
	IT・POST	25	9	14	5	11.6	1.41	-0.88
h	G-TELP・T	18	65	105	40	90.28	11.94	
	G-TELP・G	18	25	60	35	37.22	8.26	
	G-TELP・L	18	10	50	40	26.11	9	
	G-TELP・R	18	15	50	35	26.94	9.26	
	IT・PRE	18	7	13	6	9.5	2.01	
	IT・POST	18	9	16	7	11.83	2.12	2.33

ここではG-TELPによりクラス分けされた被験者が前期学期を通してどのような伸長を示したかについて概観する。被験者の構成はA・B各学科からなり、それぞれプレイスメントテストの結果により表中a・c (A学科上位) b・d (A学科下位) e・g (B学科上位) f・h (B学科下位)に分けられた。ちなみにプレイスメント時のG-TELPクラス別平均点を示すとa=127.5 (4), b=87.73 (7), c=128.42 (3), d=85.36 (8), e=151.9 (2), f=104.0 (5), g=153.0 (1), h=90.28 (6)となっており(括弧内数字は順位)、4月の講座開始時ではひとまず妥当なプレイスメントが達成されたと思われた。しかし4月および7月に並行実施したInterchangeテスト結果によって分析すると、上位・下位クラスの区別なくその伸長度に大きな差が見られる。平均点に注目すると4月の段階ではa=10.17 (6), b=10.73 (5), c=11.21 (3), d=11.07 (4), e=11.48 (2), f=10.04 (7), g=12.48 (1), h=9.5 (8)であったが、学期末の7月にはa=11.83 (プレとの差+1.66, 順位6→4以下同), b=12.18 (+1.45, 5→3), c=11.58 (+0.37, 3→7), d=11.36 (+0.29, 4→8), e=12.33 (+0.85, 2→2), f=12.68 (+2.64, 7→1), g=11.6 (-0.88, 1→6), h=11.83 (+2.33, 8→4)となり、両学科に等しく下位クラスの伸長が見られる一方で、上位クラスの伸びがもうひとつ鈍いことが数字の上で示された。もっともInterchangeテストの平均点で比較した場合、4月の段階で既に上位と下位各クラスの逆転現象が起こっており、例えばaクラスはG-TELPによる判定では上位クラスであるが、Interchangeテストでは平均点が10.17と全8クラス中6番目にあたる低い水準となっており、両テストの結果を総合的に判断した場合、4月の段階で適切なプレイスメントが達成されたのかという点に疑問が生じる。先に関連の項でも触れたが、G-TELPとInterchangeテストとの相関係数が概して低いことを踏まえると、これら2つのテストはかなり性質の異なった能力を測っているものと推測され、さらに学習効果や伸長度の面から考えても、今回実施したG-TELPによるプレイスメントには依然として多くの課題が残ったといえそうである。

(4) 考察

プレイスメントテストの一部にリスニングを導入することは、価値ある成果を生む反面、難しさも伴う。これは本調査で用いられたテストに関わらず一般的な聴解テストにおいて共通する現象であるが、テストで使用される語彙そのものはさほど難しいものでなく、十分な時間をかけ、またあるいは文字として書き起こせば、発話内容（通例では特定の知識の有無にテスト結果が左右されないように、一般的、普遍的な話題が望ましいとされる）を正しく把握できるのにも関わらず、ひとたび音声情報として提示されると大まかな内容の見当すらつかないといった「聞き取り訓練の決定的不足」がそのまま結果として現れると予測できる。また通常、テスト項目は「易から難」の原則に基づいて配列されるものとされており、一問一答や短文応答のような単純なものから徐々に複雑な会話問題などへと流れていくのが一般的であるが、今回用いられたテストでは項目によっては「まとまった量の英語を聞き取りつつ、同時に（短時間に）複数個の問題に解答する」あるいは「解答に必要な複数個の要素を長期記憶として保持しつつ英文を聞き取る」といったかなり高度な能力を問われるものが含まれており、被験者全体のうちの程度が問題そのものに対応できたかについてはやや疑問が残る結果となっている。

本学の新生入学生の場合、前期学期（4月～7月）には主にLL教室を利用し、リスニングおよびスピーキングを中心とした講義を展開する（平成14年度現在）ため、学期開始の段階でリスニングテストの結果に基づきクラス決定を行うことは合理的である。しかしテスト実施の段階では問題も散見された。とりわけ「音響設備の充実」は、本実験のような音声に頼ったテストを行う際には重要な要素となる。今回は教室運営上の都合から、約70～80人が一度に大教室でG-TELPを受験することとなったが、音響設備を含むテストの実施環境は必ずしも充実していたとは言い難く、これは本来であればまずスピーカーやデッキの音質を確保し、全員の被験者に等しいテスト条件を保証すべく入念な準備作業が不可欠であろう。

5. まとめ

コミュニケーション能力の育成に主眼を置いた英語教育の必要性については、もはや議論の余地がないものといえる。英語に限らず、あらゆる外国語を学習する目的は、よほど特別な場合を除いて実際に相手と話をしたり、本を読んだり、手紙を書いたりできるようになるためである。中でも国際的な人間交流が盛んな現代にあっては、音声言語を用いたコミュニケーション能力の獲得に多くの学習者の要求が集まるのは当然ともいえる。そのような要求に応えるため、本学では「現代英語」科目を中心にLL教室を用いた授業を展開してきた。しかしながらさまざまなレベルの学習者に対して同一の教材を用いて行う授業では、学習効果を高める上で重要な要素である「学習者に対して最も適切な教材を与える」という条件を満たすことが困難であった。そのような状況を打開するためのひとつの方法として平成13年度より本格的に実施されているのが習熟度別クラス編成である。本稿では、習熟度別クラス編成を実施する上で不可欠なプレイスメントテストの有効性について論じてきた。

音声言語を主として扱う以上、その運用力（主として聴解力）を重視した方がより学習者の実態に即したクラス編成を可能にするという想定に基づき、今回 G-TELP を新たに採用し、クラス編成の資料とした。結果は本論で述べた通り、聴解・文法をはじめとする各テスト間の相関が認められず、残念ながら学習効果を高められるようなクラスが編成できたとは必ずしもいい難い。その原因については、G-TELP がアメリカで開発されたものであり、主たる対象がアメリカ国内の非英語話者であることや、必然的に「聴解力に比べて文法力の弱い」学習者を想定していることにより、本実験のような日本人学習者にとっては「文法問題は比較的易しく感じられる反面、聴解テストは難しい」という今回の傾向は十分理解できる。

これまでの研究で明らかのように、個々の学習者に対して適切な教材や指導方法を探ることが学習効果を高めることは事実であり、今後も習熟度別クラス編成を継続して一層の学習効果向上の努力を続ける必要がある。そのためには信頼性・妥当性の高いプレイスメントテストの実施が不可欠である。今後も、従来使用してきた Jacet Basic Listening Comprehension Test など国内で開発されたものを含め、現時点で利用できるテストの内容をさらに検討し、対象者の学力を最も正確に測定できるテストとはどのようなものかを探っていく必要がある。

(さとう・としこ 産業情報学科)

(なかがわ・たけし 産業情報学科)

(やまな・とよみ 社会福祉学科)

注

(1)「どんなテストを用いて学生のプレイスメントを行うか」は各大学に共通する難題のひとつである。近年社会人や学生を中心に受験者数が急増している TOEIC (Test of English for International Communication) は、基礎的な英語コミュニケーション能力を測定する目的でそのジュニア版ともいえるべき「TOEIC Bridge」を開発し、既に一部の大学ではプレイスメントテストとして用いられ始めた。福岡女学院大学短期大学部では「(それまでプレイスメントに用いていた TOEIC では) 行事が多い4月に説明を含めて約3時間を要するテストを実施することは困難であり、また TOEIC を難し過ぎると感じる学生の負の心理的影響を憂慮した(同大学専任講師 植田氏, 談。TOEIC Friends 2002年11月号 p. 114)」結果、設問や使用語彙が TOEIC より平易で身近(テスト所要時間も半分)である TOEIC Bridge を選択したと述べている。さらに植田氏は適切なプレイスメントの難しさに関して「入試形態の多様化によって学生の英語能力にバラツキが見られるようになったことから習熟度別クラス編成を導入した。しかし教員自作のプレイスメントテストでは、実施毎に全体の得点分布は把握できても個々の伸びを追跡調査することが困難だったため、評価基準が一定のモノサシを用いて能力を測定・評価する必要が出てきた」と指摘している(出典は上記に同じ)が、これはまさしく本学における課題ともいえる。また本実験で用いた G-TELP は、近く従来のレベル1~4に加えて「5」を新設する動きがあるものの、先に述べたように内容的に日本人学習者にふさわしいものかという問題は依然として残される。

参考文献

- Benati, A. 2001. A Comparative Study of the Effects of Processing Instruction and Output-based Instruction on the Acquisition of the Italian future tense, *Language Teaching Research* 5.2, pp. 95-127.
- Clark, E. V. 1993. *The Lexicon in Acquisition*, Cambridge University Press. Educational Testing Service 1999. *TOEFL Test and Score Data Summary 1999-00 Edition*, ETS.
- Honey, J. 1997. *Language is Power – The Story of Standard English and its Enemies*, London: faber and faber.
- 伊村元道 2000. 「逆風の中, 今こそむしろ英文法」『英語教育』vol.49, No 2, 8-9.
- Jacet (大学英語教育学会) SLA 研究会 2000. 『SLA 研究と外国語教育』リーベル出版.
- 神本忠光 1998. 「大学での『やり直しの英文法の授業』における文法項目配列例— -ing 形と -ed 形を中心に—」熊本学園大学文学・言語学論集第 5 巻第 1 号 93-111.
- 清川英男 1990. 『英語教育研究入門』大修館書店.
- 小池生夫監修 1994. 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館書店.
- 小池生夫 2000. 「総合戦略としての言語教育政策」『英語展望』No.107 Summer 2000, 24-27.
- 小寺茂明 1990. 『英語の指導と文法研究』大修館書店.
- Krashen, S. D. and Terrell T. D. 1983. *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*, Alemany Press. 藤森和子(訳) 1986. 『ナチュラル・アプローチのすすめ』大修館書店.
- 久保田章 1989. 「英語の複合構文習得上の困難点」『昭和63年度筑波大学学内プロジェクト研究報告書』7-28.
- Larsen-Freeman, D. and Long, M.H. 1991. *An Introduction to Second Language Acquisition Research*, Longman.
- 望月昭彦編著 2001. 『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館書店.
- Murphy, R. 1990. *Essential Grammar in Use*, Cambridge University Press.
- 新里眞男 1992. 「H. E. Palmer の指導法とその現代性」『筑波大学学校教育部紀要』第14号 275-290.
- 大友賢二 1996. 『項目応答理論入門』大修館書店.
- 岡田伸夫 1999. 「英語力の低下と文法力—文法のおもしろさを学生に知ってもらうために—」『英語教育』vol. 48, No7, 17-19.
- Radford, A. 1981. *Transformational Syntax: A Student's Guide to Chomsky's Extended Standard Theory*, London: Cambridge University Press.
- 佐々木行雄 1991. 『応用言語学：理論と実践』ニューカレントインターナショナル.
- 佐藤敏子・中川武・岡田あずさ 2001. 「効果的な英語学習指導に向けて—学習者の文法運用力調査—」『つくば国際大学研究紀要』vol. 7, 47-66.
- 佐藤敏子・中村典生 1997. 「つくば国際大学生の英語聴解力調査—JACET基礎聴解力標準テストを使ったデータ分析—」『つくば国際大学研究紀要』vol. 3, 93-106.

- 佐藤敏子・中村典生 1998. 「Shadowing の効果と学習者の意識」『つくば国際大学研究紀要』 vol. 4, 47-57.
- 佐藤敏子・中村典生 1999. 「リスニングの指導法とその効果的な学習環境」『つくば国際大学研究紀要』 vol. 5, 15-28.
- 佐藤敏子・中村典生 2000. 「英語聴解力と文法運用力」『つくば国際大学研究紀要』 vol. 6, 55-65.
- 佐藤敏子・山名豊美・中川武・岡田あずさ 2002. 「文法運用力とその効果的な指導法」『つくば国際大学研究紀要』 vol. 8, 1-21.
- 高梨庸雄 1995. 「なぜ文法が「悪者」になるのか」『英語教育』 vol. 43, No13, 11-13.
- 田辺洋二 1995. 「学校文法の行方」『英語教育』 vol. 43, No13, 8-10.
- 竹蓋幸夫 1984. 『ヒアリングの行動科学』 研究社.
- 田中敏・山際勇一郎 1994. 『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』 教育出版.
- 田崎清忠 1995. 『現代英語教育法総覧』 大修館書店.
- 植村研一 1996. 「脳から見た外国語教育」 語学ラボラトリー学会第36回全国研究大会講演資料.
- Ur, P. 1984. *Teaching Listening Comprehension*, Cambridge University Press.
- VanPatten, B. 1990. "Attending to Form and Content in the Input", *SSLA* 12, pp. 287-301.
- White, L. 1989. *Universal Grammar and Second Language Acquisition*, John Benjamins Publishing Company. 千葉修司・ケビン・レソ・平川真木子(訳) 1992. 『普遍文法と第二言語獲得』 リーベル出版.
- White, V. W. 1988. *The ELT Curriculum*, BLACKWELL.
- 柳原由美子 1995. 「シャドウイングとディクテーションの効果について」 *Language Laboratory*, vol. 32, 73-90.
- TOEIC Friends 2002年11月号 株式会社国際コミュニケーションズ
- G-TELP (General Tests of English Language Proficiency)
- Interchange Placement Test
- Jacet Basic Listening Comprehension Test Form A

The Role of Placement Tests: for Setting Up the Effective Graded English Classes

Toshiko Sato, Takeshi Nakagawa and Toyomi Yamana

This paper reports on how G-TELP functions as setting up the graded English classes, focusing on its correlation with Interchange Placement Test. Each of the following sections explains;

- (1) the prominent need for graded English classes,
- (2) the major role of the placement test,
- (3) data collecting (through G-TELP and Interchange Placement Test), and
- (4) data analyses.

The correlation coefficients of these two criteria have only reached to 0.394 (with Interchange, as a pre-test) and 0.122 (post-test). These low figures result in the discrepancy between what the authors expected and the outcome of G-TELP, taking its background and the purpose into account. Further experimental researches will make it clearer on how we accomplish the more effective gradings for developing the overall English skills of learners.

Key Word: graded classes, G-TELP, placement test